

信 毎 歌 壇

小島 なお選

訓練で机の下に潜るとき猫のように居心地がよい
いつものと言つほどハイな客でなし窓際片隅冬日
の入りて
三人の米寿がひと口語らいて部屋を出るときベン
ギンのことし
「アフォーダブルハウジング」なぜ英語なのか「手
頃な住宅」で良いのに
カーテンの隙間から見る夕暮れよえいえんなんか
にまけてたまるか
満席で「第九」を聴きし二階席オベラグラスにデ
ノール正君
寒い日はする事無しと決め込んで三分バスターラ
コで和えよう
白杖を手に阻まれ立ちつくすわれに師走の風が集
まる
伐採のリンゴ畑に残されし防霜ファンの只響回る
桧の木の下に置く水差しに厨のあかりやさしく
届く
佳作
もう要らぬもう買わないと思いつつ通販カタログ
来る度に贈る
閑店の長野銀行算輪支店大きな窓に感謝の二文字
(箕輪町) 柴 和夫

選 評

第一首、暗くて狭いところにうずくまる猫の気持ちで。訓練である安心感が奇妙な長閑さを連れてきた。第二首、「ハイな客」に笑ってしまう。常連客ではあるけれど、ローな時間を味わう窓辺。第

三首、一日語らう体力と話題のある友人たち。歩幅の狭い歩みをチャーミングに比喩した。第四首、何でも英語に言い換える時代。素朴な違和感が眩くような散文調の韻律に聞こえてくる。

米川 千嘉子選

失明に筆を断たれしわれにして賀状の季には墨の
香を恋う
孫歌うまきじやくのジャック「われ今だ何を測れ
ばよいかと迷う
「かつちゃんじゃない目だけわかる我の目は一
重で小さく腫れぼったい目(中野市)小林かつ子
新麗に酒吹きかけて注連を纏うこの一年を清める
ことく
指先で髪に残りを探るよと言葉選ひて思ひ伝えぬ
小さき手で脚立に上り柿を握るママには放りばは
には手渡し
パソコンがあるのにガリ版探し出し賀状作れば昭
和の香りす
キッチン之母の唇に丸をする次に来る日と秋の花
火と
震降る夜に轢かれたる子狸の傍を離れぬ狸の夫婦
極寒も二キロ走れば汗が出る生きているってこ
ういことか
佳作
寄せ鍋に海と山とが顔合わせ熱気むんむん古里自
慢
膝痛めテニス出来ぬといながらラケットを持ち
歩く彼あり
(千曲市) 上原 博司
(佐久市) 太田 登子
(中野市) 小林かつ子
(長和町) 羽毛田 栄
(安曇野市) 細川 恒
(長野市) 市岡恵利子
(長野市) せきたつお
(長野市) 加藤 陽介
(小諸市) 川村 聡子
(佐久市) 高橋衣里子

選 評

第一首、年賀状や書き初めで年末年始は墨の香りが懐かしい季節。毛筆でよく書いていた作者にはいっそう。第二首、NHK・Eテレの番組で人気の歌。大人が測るべきものは長さや重さに限らない

かもしれない。第三首、かつ子さんだから「かつちゃん」。味がある呼び方でユーモラスな一首。第四首、新年を迎える行事や準備は年々縮小するばかりだが、手間をかければこそそのめでたさがある。

小池 光選

前をのみ見て走りゆく選手たち冬の雨降る都大路
に
実家住みの弟からの電話にはよくない知らせを覚
悟して出る
爺さまと山の畑に芋を掘る熊除けの鈴腰にぶら下
げ
冬至湯に友と浸りて恋仇たりし若き日慰りくる
小一の「舌切すずめ」の爺役の友は今ではほんと
の爺なり
A-1の進化目覚まし尋ねればおやつと思ふ短歌を
つくる
果しなき深き冬空東樹園の徒長枝透きてひとときは
青し
夜を通し餅を掲きたる遠き日よ幼き我はそばで見
てをり
戸隠に畑を持ちし小島さん熊の足跡S字のごとく
と
新聞を開いて見ると嫌な顔ブーチン見ると身の毛
がよだつ
佳作
手を入れぬらんご畑に実のなりて淋しうなる紅
色をせり
休肝日に休刊日も重なりてなんだか淋しい師走の
月曜
(佐久市) 高橋衣里子
(東御市) 竹内 幸彦
(長和町) 羽毛田 栄
(長野市) 南郷 修二
(宮田村) 小田切孝子
(小諸市) 星野 直人
(小諸市) 篠原 昭枝
(飯綱町) 坂井 寿男
(長野市) 松本 博人
(大桑村) 生路 聡

選 評

若者が力いっぱい走るすがたは、心打つもの。見ていて励まされる思いがする。まして雨の中の都大路を走る高校駅伝。長野東高校の全国制覇は素晴らしい。第二首、めったに電話などよこさ

ない弟からの電話。なにかあったのだ。覚悟して受話器をとる。よくわかる心境。第三首、熊の被害がものすごいことになっている。熊除けの鈴を鳴らして老夫婦が山の畑仕事。くれぐれもご無事で。